

説教余滴 一年を振り返って、《哀歌3：22》

早くもやって来ました、2020年最後の主日礼拝。
一年を振り返る時です。それが歳晩礼拝。
そして、やって来る新しい一年を深く思い、主への信頼を更新する時。

誰にとってもこの一年は、「コロナ感染症」に尽きるのではないのでしょうか。精神的にも、経済的にも、体力・気力・ライフスタイルのすべてにおいてそれぞれにご苦勞の多い一年でした。礼拝を停止された教会も多い中で私たちは、礼拝を続けることが許されました。
これは、特別に感謝することです。特筆大書に値します。

クリスマス礼拝で受洗したお二人と信仰生活50年記念の方にお贈りした聖句をご紹介します。文語訳聖書です。

「われらの尚ほろびざるはエホバの仁慈(いつしみ)によりその憐憫(あわれみ)の尽きざるに因る。これは朝ごとに新(あらた)なり。」エレミア哀歌3：22. に23節の初めを加えました。

なぜ文語訳なのか、とお尋ねがあるでしょう。口語訳、新共同訳、聖書協会共同訳では、最初の部分「われらの尚滅びざるは」を欠いています。原文に忠実に訳した、と思いますが、神に背いている私たちが生かされて生きているのは、神さまのご愛によるものだ、という事を直接的に表現しているので、こちらが良い、と感じます。その愛の顕れとしてのみ子イエスの降誕を寿ぐみ言葉と理解できます。

更に、生かされて生きているこの自分はどうかしたらよいのだろうか。何の能力もない、怠惰で無気力な罪人。こんな自分を、主なる神は用いようとしておられる。

青年時代、聖書を読み始めた頃、覚えた聖句です。罪びとにもかかわらずなお生かされている有難さ、そして、生かされている者には使命がある、と学びました。